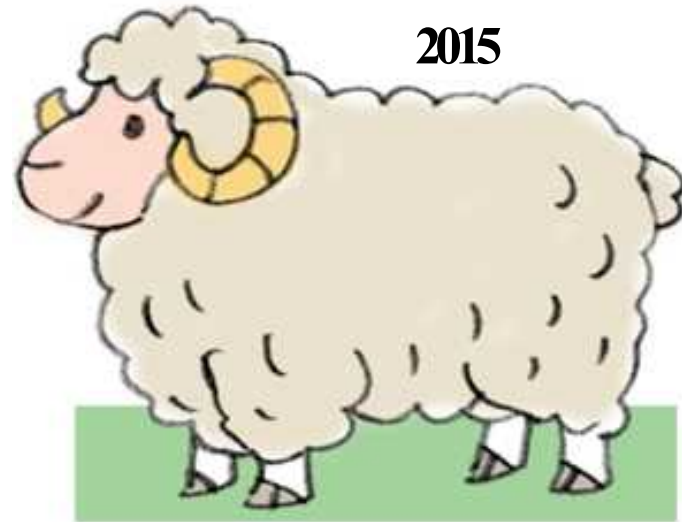


インターネット俳誌／SEIGETU

清月

12 中の出句 15 名 延べ 677 句

2015



終刊号 平成27年12月

当誌の終刊について

当会は、ペーパーレス俳句会として発足したインターネット俳句会でしたが、
会員の方からペーパーでも句を残したいとの要望により、これまで当誌を発行し
て参りました。

本号を以て平成二十八年六月の当会の閉会に先立って、当誌の終刊号といたし
ます。

平成二十七年十二月

清月庵にて 野田 ゆたか

目次

近詠 1

雑詠選 3

寸感 8

平成二十七年中の各月巻頭句一覧 9

近詠

野田ゆたか

数へ日の動き出したる厨かな

返信のメール打ち了へ日短

菊を焚く香り拵る日和かな

魚捌く手練を売りに年の市

越し方を顧み晦日蕎麦啜る

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

まづ孫の背中を流す袖湯かな 千葉 清水恵山
笹鳴の声の弾みし日和かな 同
物置の天井高く年木積む 同
もてなしは真つ赤に燃ゆる囲炉裏の火 同
齒朶刈の腰を上げては呼び合ひぬ 同
しぐるるや幌を下して人力車 岐阜 石崎そうびん
朴落葉くるりと波に乗りにつけり 同
築地塀背に一行や日向ぼこ 同
風花や静まり返る水源地 同
城山の北は断崖冬紅葉 同

余白なき手帳しみじみ年惜む 吹田 池下よし子
冬うらら口上長き大道芸 同
朝刊の散らし隈なく日向ぼこ 同
特集の昭和演歌や温め酒 同
行く年や注ぐワインのペアグラス 同
闇汁の闇の中より笑ひ声 静岡 渡邊春生
ベランダをはみ出してゐる聖樹かな 同
嬉々として山猿走る木守柿 同
区切りなき仕事を区切る寝酒かな 同
クリスマス星の帽子の子の遊戯 同
なほ燃ゆる乾通りの冬紅葉 岡山 橋本幹夫
蒼白き馬の双瞳寒昂 同
難行を偲ぶ座禅や成道会 同

キリストの神に贖ふ聖夜劇 岡山 橋本幹夫
行軍の踵影踏む寒の月 同
朱に染める寒夕焼けや壇ノ浦 千葉 田村公平
枯蔦の壁に窓無し文学館 同
窓際の母の居場所に冬日射す 同
宝くじ億はいらぬと負真綿 同
黙祷で始まる会や紅葉散る 同
見上げれば師走の雲の忙しさ 大阪 木村宏一
古里の障子明かりに目覚めけり 同
はやぶさのスイングバイや冬の宵 同
枯芙蓉軽くなりたる老の日々 同
書込も残り少なくし古暦 同
此処かしこイベント多しクリスマス 三重 山口美琴

里山は人影見えず雪催 三重 山口美琴
年の暮時間ばかりが過ぎてゆく 同
オープンの衣料店内着ぶくれて 同
はうれん草ポパイを知らぬ子らに説く 同
巨福門くぐりて冬の空仰ぐ 千葉 筒井省司
暮早し暗き公園チャイム鳴る 同
一服を心静かに冬ぬくし 同
濁声と甲高き声歳の市 同
電飾とワインに酔ひし聖夜かな 同
散つてなほ花くれないの寒椿 三重 後藤允孝
身に適ふ使ひ慣れたる日記買ふ 同
年惜むこの一年の回顧緑 同
頭越し鳴くだみ声の寒鴉 同

園児等の朝のかけっこ冬ぬくし 三重 後藤允孝
そそくさと帰る人波日短か 鳥取 瀬尾睦夫
一仕事終へて至福の柚子湯かな 同
山盛の冬菜重たし猫車 同
お似合ひと売子の勧め冬帽子 同
幾たびも沈むナイフや聖菓切る 同
カリオンの響きとともに散る紅葉 大阪 森戸しゆじ
木枯が梢で磨く北斗星 愛知 駒田暉風
冬の星見えぬ黒天足さす 愛知 石川順一

寸感

ゆたか

まづ孫の背中を流す袖湯かな 恵山

今も冬至の日に浴槽に袖を浮かべて入り
無病息災を祈る習慣が伝承されてきている。
お孫さんの背中が年々大きく成長するの
を楽しみにされている様子が覗えます。
お孫さんの成長を上手く詠まれている。
しぐるるや幌を下して人力車 そうびん
冬の一时的な雨を「時雨」と詠まれだし
たのは、京都・洛北(北山)の雨であったと
いう。

人力車の背景に省略されている京都市内
の町並みなど歴史的観光地が連想されます。
中七を効かせ、そつなく仕上がっている。
余白なき手帳しみじみ年惜む よし子
手帳も日記同様に歳末になると余白がな
くなり、新年を待って新しい手帳を用いる。
記載事項から、この一年を顧みられてい
る作者の様子がよく伝わってきます。
俳人の一年が端的に詠み込まれていて妙。

闇汁の闇の中より笑ひ声 春生

昔は、灯を消せば真闇であったでしょう
が、今では闇を作るのにも苦労します。
下五がよく効いて闇の深さや賑わいがよ
く伝わってきます。

臨場感を楽しめる句に仕上がっている。

なほ燃ゆる乾通りの冬紅葉 幹夫

本年は、十二月上旬に紅葉の乾通りが公
開された。公開後の乾通りの景でしようか。
乾門から出入りする車が時折通る静かな
紅葉・黄葉の乾通りが目には浮かびます。

乾通りの景が見事に描写されている。

朱に染める寒夕焼けや壇ノ浦 公平

壇ノ浦という地名には、源平合戦場の意
や平氏敗戦の意などが含まれています。
史実の平氏の滅亡が重なり合って寒夕焼
の余情として淋しさ・儚さは伝わってきま
した。

省略の効いた余韻のある句となっている。

平成二七年中の各月巻頭句一覧

一月号	何事も元日なれば赦されて	岡山	橋本幹夫
二月号	穴太積いまも揺るがず猫柳	岐阜	石崎そうびん
三月号	躑躅燃ゆ開拓村の無縁墓	静岡	渡邊春生
四月号	レガッタの声真つ直ぐに滯二線	岡山	橋本幹夫
五月号	山影の迫りくる宿夕河鹿	岐阜	石崎そうびん
六月号	ご祭神偲ぶ御苑や花菖蒲	千葉	清水恵山
七月号	万緑の上に真白な城浮かぶ	同	
八月号	あの山が次の札所や翹雲	岐阜	石崎そうびん
九月号	島々の秋を繋げて連絡船	千葉	清水恵山
一〇月号	舂する川中島の威銃	同	
十一月号	惜秋や雨しめやかに並木道	吹田	池下よし子
一二月号	まづ孫の背中を流す柚湯かな	千葉	清水恵山

インターネット俳句 清月
終刊号
平成27年12月中の出句から

発行
平成28年 1月20日

主宰 兼 編集
野田ゆたか

発行所
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
[https://haiku575.info/seigetukai/
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)